

マイクロカウンセリング研究

The Japanese Journal of Microcounseling

第2巻 第1号

2007年3月 Vol.2, No.1

卷頭言 福原真知子 1

総説

Professional Psychology 福原真知子 3

原著論文

発達カウンセリング・療法理論に基づく異なる認知発達的スタイル
でのビデオ・モデリングが実験参加者の言語的応答に及ぼす影響

..... 玉瀬 耕治 5

学会：概観と現状 福原真知子 19

M 日本マイクロカウンセリング学会

The Japanese Association of Microcounseling (JAMC)

編 集 規 定

1. 本誌は日本マイクロカウンセリング学会の機関誌であって、原則として1年1巻とし1号と2号にわけて発行される。
2. 本誌は、原則として本学会員のマイクロカウンセリングに関する論文を掲載する。
3. 本誌には、原則として原著論文、資料論文、事例報告、展望、特別論文、及び学会ニュース、会報などの欄を設ける。
 - (1) 原著論文は、オリジナルな内容の研究論文とする。
 - (2) 資料論文は、追試的内容あるいは試験的内容の研究論文とする。
 - (3) 事例報告は、リサーチベースドの姿勢を保った事例発表の形式とする。
 - (4) 展望は、内外の研究を広く収集整理し、総合的に概観した論文とする。
 - (5) 特別論文は編集委員会で、主としてマイクロカウンセリングまたはその関連領域の専門家に依頼する特別寄稿論文とする。
 - (6) 学会ニュースは、マイクロカウンセリング学に関する内外の情報及び、内外の関連学会の情報を掲載する。
 - (7) 会報は、本学会の会務報告に関するものである。
4. 3 の (1), (2), (3) および (4) の論文は原則として投稿による。投稿された論文は査読を経て、編集委員会で掲載の可否が決定される。なお査読は編集委員以外の会員に依頼することがある。
5. 採択論文の掲載に要する費用は、原則として本学会で負担するが、図表等に関してはその費用の一部を執筆者に請求することがある。
6. 本誌に掲載した論文の執筆者に対して抜刷10部を贈呈する。これを超える部数については執筆者の負担とする。
7. 本誌に掲載した論文の原稿は、原則として返却しない。
8. 本誌に掲載された論文を無断で複製及び転載することを禁ずる。
9. 本誌に掲載された論文の著作権は本学会に帰属する。

執 筆 規 定

1. 論文の内容は、未刊行のものに限る。
2. 論文の採否は、査読を経て編集委員会により決定される。
3. 論文の長さは、原著論文については原則として8000~12000字相当（図表を含む）、資料論文、事例報告は2000~4000字相当とする。展望は2000字相当とする。特別論文は状況に応じて決定する。
4. 原著論文及び資料論文は原則として、問題（目的）、方法、結果、考察、（結論）、文献からなることが望ましい。
5. 原著論文、資料論文および事例報告には要約、キーワード（3語程度）および英文アブストラクトをつける。内容の長さは100~150語とし、英文については専門家の校閲を受けること。
6. 本文の記述は簡潔で明解にし、現代仮名遣い、常用漢字を使い、表、図は必要最小限にする。
7. 本文中の外国語（原文）の使用はできるだけ避け、外国語は外国人名、適切な訳語のない述語、書名やテスト名などに限る。
8. 数字は原則として算用数字を用いる。計量単位は国際単位を用いる。
9. 略語は一般的に用いられるものに限る。ただし、必要な場合は、初出の時にその旨を明記する。
10. 表と図は別紙に書き、通し番号を付し、表の題はその上部に、図と写真の題は下部に書く。これらは執筆者の責任で作成し、本文に挿入する場所を明記する。
11. 引用文献は、著者名のアルファベット順に一括して掲げる。その記述方法は日本心理学会発行の「執筆・投稿の手引き」（2000年版）を参照すること。
12. 脚注は通し番号をつけ、本文と同ページの下段に記し、本文中には、それに付する番号を付ける。
13. 論文は原則としてワープロ原稿で4部提出する。原稿の体裁はA4用紙に横書きで11ポイント文字、字数は1枚1000文字（40×25）、余白上下左右とも30mmとする。なお著者名・機関名・謝辞は別紙に記入すること。
14. 引用文献以外の詳細も原則として、日本心理学会発行の「執筆・投稿の手引き」を参照の上、執筆すること。
15. 投稿論文にはフロッピイを添えることがのぞましい。

※本執筆規定は平成18年3月より有効

付記：本執筆規定は、日本マイクロカウンセリング学会会則に細則として掲載予定である。

卷頭言

春暖の候、皆々様にはご健勝でお忙しい日々をお過ごしのことと存じます。

学会誌 Vol.2, No.1 をお届けいたします。今回は学会に移行後3冊目の会誌となります。本誌は昨秋ISSNナンバーを取得し、名実ともに学術組織（団体）にふさわしい活動をおこなっていると自負いたしております。皆々様のご協力のたまものでございます。

原著論文は当該学会においてもまさに「説明責任を果たす」という姿勢にふさわしい先駆的な論文であります。これに続くかたがたの投稿を切に願っております。

総説でも述べました国際応用心理学会（2006, 於アテネ）では、もう一つ、マイクロカウンセリングをテーマとするシンポジウム（Microcounseling and its Application all through the World）を発表してまいりました。これは、当該学会に出席できなかったアイビイ博士の要請にしたがって筆者がオーガナイズしたもので、シンポジストとしてアメリカ、ギリシャ、ルーマニアのマイクロカウンセリング研究者が参加しました（マイクロカウンセリングニュースレターNo.16をご参照ください）。予想以上にマイクロカウンセリングがカウンセリングの共通言語として国際レベルで認識されているようでした。この種の国際会議でいつも思うことは、やはり相手を「聴く」ことの重要性です。今回は特にそれを痛感致しました。

8月の総会・研究会には学会にふさわしく、2つの学会発表がありました。ひとつは玉瀬耕治会員による『発達カウンセリング・療法に関する基礎的実証的研究』です。二つ目は福原眞知子、山本孝子、寺川亜弥子、大西靖子会員による「ウェルネスの研究」でした。

前者はアイビイ博士が開発した発達カウンセリング・心理療法（DCT）の日本版作成の試みです。これについてはさらに本号で原著論文の形でご披露いただきました。後者はアイビイラの開発したウェルネスマネジメントに基づいてあみ出された“自己”へのマイクロ技法の活用を考えるべく、まずはその尺度の日本版作成をこころみたものです。

以上をご報告し、ご挨拶にかえさせていただきます。

皆々様におかれましては年度末のなにかとお忙しい時期と思いますが、ご自愛ください。

平成19年3月31日

日本マイクロカウンセリング学会会長 福原眞知子

総 説

日本マイクロカウンセリング学会
会長 福原眞知子

ご挨拶にも述べましたように、カウンセリング心理学の分野も心理学の他の分野の例にもれず、その知見の「一般化」が必須とされるようになりました。それにともない、そのアカウンタビリティ（説明責任）の重要性を再認識することの必要も迫られております。これは国際的な流れであり、日本は少々遅かりしという感もぬぐえません。私もマイクロカウンセリングやサイコエデュケーション（心理教育）でそれらの問題を追求する中、カウンセリング・臨床心理分野の専門性や資格化の問題にも関心をもち、機会あるごとに、国内外の同学のかたがたとも討論してまいりました。たまたま昨夏、国際応用心理学会（IAAP）の招聘で、それらの傾向について討論する手がかりとして、日本からの発信をおこなうべく、一つのシンポジウムをこころみました（Professional Psychology in Japan, 2006）。

上記については改めて討論する機会もあるかと存じますが、ここではその折に筆者が概観した‘テーマ’、‘Professional Psychology’の世界的動向について一部をご紹介します。援助関係専門家の方々の指針の手がかりに供することができればと存じます。ここではかならずしも私どもにもっとも関係のあるカウンセリング・臨床心理領域のみではなく、いわゆる応用心理学分野（適性、アセスメント、スクール、健康心理、コミュニティなど）の領域を包括したものです。専門性についてはとくにヨーロッパでは早くから、それぞれの領域において、作業部会などによる調査もすすめられているようです。米国とカナダは大学などにおける教育システムが早くからかなり統一されていたせいか、資格などは明確ですが、実際場面での活用・機能となると、問題もあるようです。アジア地区では昨年アジア心理学会も確立されましたし、アジアの中ではこの分野に先駆的体験をしている日本もおおいに参加し、世界の人々の精神的健康への提言と福祉に参画できればよいがなどと考えます。

日本においてはカウンセリング・臨床心理学分野が真のアイデンティティを獲得し、社会的貢献の役割を十分に果たすことができるようになるには、研究と教育、専門家の養成、専門家の教育現場での機能・役割の認識、研究の強化、実践を意識したトレーニングの強化、研究・実践から現場への移行のための研究と実践、それに社会的認識と職場確保は必須であります。これらは私どもマイクロカウンセリング学会の発展のためにも、常にバックボーンとして心得ていなければならぬかと考えます。

Professional Psychology Overlook

“Giving psychology away” has been voiced since the 1960s with the evolution of positive psychology. We, psychologists might have to be aware of its professionalism in order to be able to contribute to the QOL of the people in their respective cultures. The role of organization of psychology has been discussed by Lunt and others (Lunt, E., 2004).

Dr. Lunt, I. (2005) investigated International Mobility in regard to education and the training of psychologists. She found no global consensus, but there are some regulations in different regions of the world: For instance, the U.S. and Canada are likely to be concerned with licensure and / or professionals whose degree are doctorates, though recognizing master-levels in certain area. But Canada does not necessarily require post-doctoral experience. In Europe, only the U.K. requires doctoral-level training for clinical psychology and for other psychology professionals. The European Federation of Psychological Association (EFPA) is making optimal standards (1981) and progress in education for psychology professions (5 years of university education plus one- year of master's courses plus supervised practice). Countries in the Asian-Oceania region are not allied, but respective national organizations are beginning to pay attention to this issue and a proposal for the issue has been voiced (2004). This progress on this issue might be partly related to the economy, and “keys” for improvement are consumers, demands for psychologists, advocacy efforts by psychologists / psychology organizations to promote multiple pathways and cooperation across member states. We will find that in order to unlock those keys, efforts of individual psychologists as well as the collaboration of national and international organizations is needed. Those are important for they are the basis for professionals as the resource for contribution. Factors affecting the improvement of contribution of professional psychologists exist not only for social-economic reasons in Japan but also in other cultures.

- Fukuhara, M. (1989). Counseling Psychology in Japan. *Applied Psychology: An International Review*, **38**, (4), 409-422.
- Hall, Judy E. & Lunt, Ingrid (2005). Global mobility for psychologists: *The Role of Psychology Organizations in the United States, Canada, Europe, and Other Regions*. American Psychologists Association.
- Tanaka-Matsumi, J., & Otsui, K. (2004). Psychology in Japan. In M. J. Stevens & D. Wedding (Eds.), *Handbook of international psychology*. New York: Brunner-Routledge.

原著論文

発達カウンセリング・療法理論に基づく異なる認知発達的スタイルでのビデオ・モデリングが実験参加者の言語的応答に及ぼす影響

玉瀬耕治

帝塚山大学

The Effect of Video-Modeling in Different Cognitive-Developmental Styles Based on the Developmental Counseling and Therapy Assumption upon Participants' Verbal Responses

Koji Tamase (*Tezukayama University*)

クライエントが示す心理状態を認知発達論的視点で捉え、より効果的な介入を模索することはきわめて有意義なことである (Ivey, 1986; 福原・アイビイ・アイビイ, 2004)。それはさまざまなカウンセリングや心理療法の理論を統合しうるひとつの可能性を示唆している (Ivey, D'Andrea, Ivey, & Simek-Morgan, 2002; Ivey & Brooks-Harris, 2005)。臨床的にみたクライエントの来談初期の状態は、もっとも典型的には“どうすればいいのか分からない”という状態であるといえよう。何からどう話せばいいのか分からない、自分がどうなっているのか分からない、説明のしようがないなど、多くのクライエントはこのような混乱した心理状態におかれている。一方、発達心理学の視点から、子どもがものごとの本質を理解する過程において、あいまい模糊とした意識の状態から、はっきりとそのものの意味や本質を理解できる状態にいたるまでには、誰もが通るいくつかの発達段階がある。例えば、積木や人形を使って遊ぶ場合を考えてみよう。遊び方を知らない幼児は、まずそれらのものに触れ、それらをわけもなくさわっているうちにひとつの遊び方を覚える。さらに経験を重ねてそれらに習熟するにしたがって、同じものでもさまざまな遊び方ができることを

知る。

大人でも子どもでも、今までに経験したことのない新しい事態に遭遇すると、人は戸惑いを示し、どうすればいいのかが分からなくなる。Piaget(1949/1967)の言葉を借りれば、“操作ができない”状態になる。それは前操作的段階を示しているといえる。ここでは“操作”という言葉に重要な意味が含まれている。すなわち、操作という言葉によって、“どうすればいいのかが分かる”ことを意味している。乳児にあっては手に触れた物を動かし、それを移動させたり変化させたりして試行錯誤を重ねることによって、それが何であり、どうすればいいのかが分かってくる。大人になれば論理的にものごとを考えられるようになり、概念的な言葉を駆使して自分の心理状態や複雑な社会現象を“操作”することができるようになる。通常、ほぼ11, 12歳になるとこのような論理的思考、すなわち形式的操作が可能になる。

しかし、このことは決して大人はすべて常に論理的に思考していることを意味するものではない。何か困難なできごとに遭遇すると、大人でも自分を見失い、論理的にものごとを考えることができなくなる。このような考え方から、Ivey (Ivey, 1986, 1991; Ivey, Ivey, Myers, &

Sweeney, 2005) は Piaget の認知発達理論を援用して発達カウンセリング・療法 (Developmental Counseling & Therapy : DCT) を提唱した。この理論では、クライエントの心理状態を感覚運動的スタイル、具体操作的スタイル、形式操作的スタイル、弁証体系的スタイルの 4 つに区別している。カウンセラーはクライエントが現在どのスタイルの状態にあるのかを査定して、そのスタイルにもっとも適合する技法を用いることを奨励している (Ivey et al., 2005)。ある意味でこのような分類は比喩的なものであり、便宜的なものであるといえる。したがって、DCT 理論では細部にわたって用語の上で厳密に Piaget 理論と対応づけることにはそれほど精力が注がれているとはいえない。たとえば、Piaget 理論における前操作的段階は DCT 理論では感覚運動的スタイルの後期に含まれている。これは筆者の理解では、このスタイルにおける感覚的および感情的要素の優位性を重視しているからである。また、Piaget 理論では弁証体系的スタイルにあたる段階は形式的操作に含まれるが、家族療法などのシステム論の考え方には適合するものとして特に組み込まれたものと考えられる。

筆者らは、DCT 理論に基づいてわが国における基礎的実証的研究を行ってきた (光武・玉瀬, 1995; 玉瀬・福田, 1998; 玉瀬・福田, 1999; 玉瀬・光武, 1993; Tamase & Rigazio-DiGilio, 1998; 玉瀬・島本, 1995)。これらの研究から、一般的の大学生でも必ずしも日常的に形式操作的スタイルや弁証体系的スタイルを用いているとはいえないことが分かっている。すなわち、日常会話においてわれわれがもっとも多く用いているスタイルは基本的には具体操作的スタイルであるといえる (玉瀬・光武, 1993)。いつ、どこで、誰が、何をしたのかということを時系列的に細かく述べて会話を続けている場合が多い。そのできごとの意味を考えたり、自己への影響を考えたりするなどの形式操作的スタイルを用いることはそれほど多くはない。なお本稿では“スタイル”という用語を用いているが、

上記の文献では“水準”，“定位”などが用いられている。これらはほぼ同義のものとして理解してほしい。これらはいずれも Piaget の“段階”に相当するものであるが、段階と水準はともに発達における縦の関係を強調するものであり、定位は横の関係を強調するものである。スタイルという言葉は、発達における縦と横の関係を柔軟に示すことができるという理由で用いられている (Ivey 私信)。山本は DCT 理論に従って“解釈”に関する一連の実験的研究を行っている (山本, 1996, 1997, 1998)。彼女の研究では、クライエントの認知発達の状態に合わせて“調節”と“同化”を適切に行い、きめ細かくクライエントに寄り添うことが重要であることが示唆されている。

次に、DCT 理論に基づく臨床的研究について見ていくことにする。Rigazio-DiGilio & Ivey (1990) は、うつ病(気分障害)の入院患者に DCT を適用し、査定と介入の実現可能性を確認している。Fukuhara (1987) は女子学生へのカウンセリングに DCT を適用し、カウンセリングに伴うクライエントの変化に応じて認知発達的変化が認められることを実証している。Ivey & Goncalves (1988) は、DCT 理論における 4 つの認知発達的スタイルを示すクライエントの例を示し、それぞれのスタイルでどのような臨床像がみられるのかを示唆している。Ivey & Ivey (1990) は M.Ivey のスクールカウンセラーとしての実践に基づいて、子どもの虐待に DCT を適用した事例を紹介している。Myers, Shoffner, & Briggs (2002) もスクールカウンセリングにおいて DCT をどのように活用できるかを例示している。Myers (1998) は読書療法と DCT を関連づけている。Cashwell, Meyers, & Shurts (2004) は、スピリチュアリティの問題を扱う際に既存の療法では限界があり危険性を伴うことを指摘し、DCT を用いることによってより広い視点からクライエントの本質的問題に対処し、発達を促すことができるなどを示唆している。山本 (2001) は DCT における“調節”と“同化”的問題を長期閉じこもり青年にあてはめて

検討し、山本（2002）は同様の問題をエンカウンター・グループの発展過程にあてはめて検討している。また、山本（2004）は対人関係で悩む大学生にもDCTを適用している。

さらに、家族療法の分野でDCT理論を発展させたRigazio-DiGilioとその共同研究者による一連の研究（SCDT理論）についても参考にすべきところが多い（Ivey & Rigazio-DiGilio, 1991; Kunkler & Rigazio-DiGilio, 1994; Rigazio-DiGilio, 1994a; Rigazio-DiGilio, 1994b; Rigazio-DiGilio & Ivey, 1990, 1991, 1993）。これらの諸研究からDCT理論は臨床の領域でもすでにかなり実証的研究が進められており、さらなる発展の可能性が見込まれる。

DCTの考え方をもっとも分かりやすく簡潔に示すのには、それぞれのスタイルの典型例を示したモデル事例を作成することである。Ivey（1992）はビデオテープ“発達心理療法による面接技法”的第2巻においてキャシイが演じた認知発達的スタイルのモデル事例を提供している。これによって、われわれは容易にそれぞれのスタイルの意味するところを理解することができる。本研究では、このビデオを参考にしながら日本の大学生の日常生活でみられる身近な問題についてシナリオを試作した。典型事例を示すために、まず、否定的情動の一つである“怒り”に焦点を当てた。これはキャシイの事例でもそうであるが、われわれの先行研究（玉瀬, 2000）からも、否定的内容の方が肯定的内容よりも認知発達的スタイルの違いを示しやすいことが分かっているからである。また本研究では4つの認知発達的スタイルのうち、弁証体系的スタイルについては作成しなかった。これは先行研究から、このスタイルは通常ほとんど自發的には現れないことが分かっていたからである。ただし研究目的によっては、このスタイルのモデルビデオを準備することの意義は十分認められる。Iveyが作成したビデオでは、大学生の日常をテーマにして同じ内容をそれぞれのスタイルごとに一人の女性（キャシイ）が演じ分けているが、このビデオを用いた実証的研究は今

ところ報告されていない。今回試作したビデオは、各スタイルについてそれぞれ内容と演者が異なる2種類の場面を撮ったものであり、テーマは“最近経験した印象に残るできごと”としている。このテーマは、最近おこった身近なできごとなら誰でも想起しやすいし、そのときのイメージや情動が鮮明に思いだせると考えたからである。

本研究では、これらのビデオを用いてモデリングの効果を調べることを目的とした。モデリングについてはすでに玉瀬（1998, 2000）や玉瀬・島本（1995）の報告がある。玉瀬・島本（1995）では“友人関係”をテーマとしてオーディオテープによるモデリングを行っている。処遇質問を、モデリングを通して行う場合と実験参加者に直接質問する場合を比較したが、処遇方法による違いは示されなかった。玉瀬（1998）では“自分の性格について”をテーマにして、ビデオ・モデリングとオーディオ・モデリングの効果を比較した。その結果、これらの群では処遇なしの統制群に比べてより高次の認知発達的スタイルを示した者が多かった。玉瀬（2000）では“高校時代”をテーマにして、肯定的経験と否定的経験を示すモデルを用い、モデリングによる事前と事後の変化を比較した。その結果、否定的経験についてのモデリングの方がより効果的であった。これらの研究と本研究での方法論上の違いは、先行研究ではモデルによって複数の認知発達的スタイルが示されている点である。本研究のようにいずれか1つのスタイルに焦点をあてて、いずれのスタイルの影響が大きいのかを調べた研究はまだ行われていない。

方 法

実験計画

3: モデリング・ビデオの認知発達的スタイル（感覚群、具体群、形式群）×2: 査定（事前査定、事後査定）の要因計画が用いられた。前者は実験参加者間要因であり、後者は実験参加者

内要因である。感覚群とは感覚運動的スタイルを示すモデルを視聴する群、具体群とは具体操作的スタイルを示すモデルを視聴する群、形式群とは形式操作的スタイルを示すモデルを視聴する群を意味している。

実験参加者

大学生 45 名（男子 5 名、女子 40 名）が実験に参加した。これらの実験参加者に 3 つの認知発達的スタイルを示すビデオのうちのいずれか（2 場面）を見せた。感覚群には 15 名（男子 1 名、女子 14 名）、具体群には 15 名（女子 15 名）、形式群には 15 名（男子 4 名、女子 11 名）が割り当てられた。実験参加者の順番による偏りが生じないように来室の順に各条件に順次割り当てた。

材料

実験では、モニターテレビ、再生用ビデオカメラ、モデリング・ビデオテープ、応答記録用カセットテープレコーダー、オーディオテープを使用した。

(1) モデリング・ビデオ

実験で使用したモデリング・ビデオは、否定的情動の“怒り”に焦点を当てた内容のものであった。予備的に大学生が遭遇しやすい 5 つの場面についてシナリオを作成した。それらのシナリオについて、筆者と実験者の間ででき具合を検討し、5 種類のうち 2 種類のシナリオを選択した。すなわち、① “共同作業でレジュメを作る話”，② “CD を友人に貸した話”，③ “電車内で友人が体調を崩したときの周りの反応に対する話”，④ “ファーストフード店での応対に関する話”，⑤ “雨の日のできごとに関する話” のうち、完成度がより高いとみなされた①と②を選択した。それぞれについて、Ivey (1991) の考え方をもとにして、3 つの認知発達的スタイルを示すモデリング・ビデオを作成した。ビデオの画面にはモデルとなる演劇部の学生 2 人のうちのどちらかが登場し、繰り返し練習を行った後、それぞれの台詞を表現した。Table 1

はビデオ録画後に再度逐語記録した内容を示したものである。これらのビデオの内容について、認知発達的スタイル査定基準 (Ivey, 1991) を参考にしてスタイルを査定した。査定は心理学専攻の学生 5 名の査定協力者が行い、6 項目からなるスタイル査定基準で、“そう思う”か“そう思わない”的どちらかで判定した。その結果、5 名全員一致で、各スタイルのモデリング・ビデオは意図した概念に沿って作られていることが確認された。このビデオは第 1 回マイクロカウンセリング学会で紹介され、その感想についても報告されている（新宮, 2006）。

Table 1 モデリング・ビデオの内容

感覚運動的スタイル

場面 1 レジュメ：聞いてくださいよ、ほんと腹立つんですけど。あの田中さんの顔。何も関係ないみたいな顔して。“ごめんねーっ”謝れば何でも解決できると思っているんでしょ。何かとっても損した気分ですよ。グループで作るレジュメがあって、それに全く協力してくれないんです。グループの意味ないですよ。用事がある、忙しいってなんだかんだ理由つけて手伝わなくて。何もやらなかったらできないです。レジュメなんて。ましてグループなのに。挙句の果てに“ごめんねー、今日は無理なの”そんなのみんな忙しいですよ。じゃ、いつならできるのって思う。いつならやってくれるのって。自分のことばかり主張して。あの人の 2 倍も 3 倍も苦労してレジュメ作って、みんな一生懸命発表してるんですよ。それを何もしていないあの人と同じように横に立っているんですよ。どう考えてもおかしいですよ、そんなの。本当にあの神経を疑うわ。

場面 2 CD：聞いてくださいよ。めっちゃ腹たってね、田中さんたらありえないですよ。CD ケースが壊れて返ってきたんです。知らん顔で返ってきて。最悪ですよ。人の物を。しらーっと全く気付かないフリして。“ありがとう”って。おかしいでしょ。おかしいよね。どう考

えても。CDのケースが真っ二つにヒビが入っているんですよ。中もぐちゃくちゃになってる。信じられないわ。どうしても謝るのがいやなんですよ。あれは。でも人に物を借りてそれを壊してくるんですよ。そりゃあ気付かないフリしたって無理よ。信じられない。神経疑っちゃうわね。本当に。もう貸したくない。絶対に貸したくない。信用できなくなっちゃった。

具体操作的スタイル

場面1 レジュメ：以前レジュメを作ることになったんです。4人グループだったんですけど、でもそのうちの一人が何だかんだ言って結局来てくれなくて。来てもあまり意見を言ってくれなくて。それで私と結局そのレジュメは他の2人が作ったようなものでした。集まりにも“今日は用事がある”と言って、来てくれないし、他の日を設定しても全く協力してくれませんでした。手伝おうともしないんですよ。本当にたいへんな部分だからこそ力を合わせてやっていこうと思っていただけに、すごくもどかしい気分になりました。何だかとっても損したような、悔しい気分になったんです。

場面2 CD：2, 3ヶ月前友達に私のお気に入りのCDを貸したんです。すごく私自身気に入っているもので。でも貸したはいいんですが、全然返ってくる様子がなくて。もしかしたら忘れてるのかもしれないと思ったし、久しぶりに私も聴きたかったからもうそろそろ返してくれるよう頼んだんです。それでやっと返ってきたと思ったら、CDのケースが大きく割れて、中の歌詞カードみたいのも破れちゃってたんです。でも返す時“ありがとう”的一言、“ごめんね”的一言もないんです。びっくりしました、その時は。もし私が友達のCDを割ってしまったら心から謝ると思います。でもその友達は全く気付かないフリをしてそのまま返してきたんです。一言でも謝ってくれたらよかったです。CDは返ってきたけれどこの一件でその友達に不信感を持つようになってしまいました。

形式操作的スタイル

場面1 レジュメ：以前グループ発表で一人の人が全く協力してくれず、むなしくなったことがありました。その人は集まりにも来ないし、何かにつけて用事を取りつけて欠席していました。他にもグループでやる課題があって、その時もしょうがないからって私一人でやったこともあるんです。そういう時に責任感を感じて私がやらなきゃって使命感に燃えてしまうんです。負けず嫌いだから、そこで私も何もしないということもできるんでしょうが、私はそこで無理して頑張ってしまうんです。だけど裏ではもうちょっと楽したいという気持ちもあって…。それがどうしてもできなくて。どうやら楽したくてもできない私の性分なんでしょうね。

場面2 CD：3ヶ月ぐらい貸していたCDを友達に壊されたんです。ずっと貸していたんですが、返ってきたら壊れてしまっていました。全く謝ってくれませんでしたし、気付かないフリをされてしまいました。前にもこういうことがあったんです。テスト前に貸してといわれたノートが全然返ってこなくて、返ってきたってテストぎりぎりで。結局私は時間、ノート見る時間なくて。こうしてみると結局私はお人よしなんでしょうね。それに友達にお願いと頼まれたら断り切れなかったり、お人よしというより、強気になりきれないんです。それは人に嫌われたくないとか、人に優しいと思われたいとかそういう気持ちが強いからなのかもしれないですね。結局は自分が傷つくのがいやだから、自分の意見を押さえてしまって、結局は損をしているんだと思います。ノートの件でも、今回のCDの件でも。

(2) 認知発達的スタイル査定基準

Ivey (1991) の認知発達的スタイル査定基準や光武・玉瀬 (1995), 玉瀬・福田 (1998) を参考にして、3つの認知発達的スタイルと、さらに各スタイルを初期と後期に分けた計6つの認知発達的スタイルに関する査定基準を設けた

(Table2)。

手続き

実験は心理学実験室で、個別に行われた。実験参加者は筆者の下で DCT に習熟した女子学生の実験者と 90 度の位置に座った。テレビは実験参加者から見て真正面、実験者の左に配置した。実験者は、実験参加者に軽く挨拶をした後、次のように教示した。“これからあるビデオを見ていただきますが、その前後にあなたに簡単な質問をします。あなたの答えは、実験の記録のためにテープに録音させていただきたいのですが、ご了承いただけないでしょうか。答えていただいた内容は、良い悪いの判断をするためのものではありません。また、その内容は統計的に処理しますので、個人の情報が外部の人に知られることはできません。ですから、安心して思ったままを答えて下さい。よろしいでしょうか。”少し間を置いて、“それでは実験を始めさせていただきます。あなたが最近経験したことで、腹がたったことや、つらかったこと、興奮したこと、おもしろかったことなど何か 1 つ印象に残っていることをできるだけ具体的に思い出して下さい。またそのできごとがあなたにとってどんな意味を持っていたのかも考えてください。それでは、そのできごとについてできるだけ詳しく話していただけませんか。”と教示した。その後、録音用のテープレコーダーのスイッチを入れた。実験参加者が答え終わると、テープレコーダーのスイッチを切った。その後、各群に“今から、ビデオを見ていただきます。このビデオには 2 人の大学生が、今のあなたと同じ質問に答えています。全部で 3 分程度です。その後にまた質問をさせていただきますので、よく見ていてください。”と教示し、ビデオを再生した。ビデオが終わると“では、さっきと同じ質問をさせていただきます。あなたが最近経験したことで、腹がたったことや、つらかったこと、興奮したこと、おもしろかったことなど何か 1 つ印象に残っていることをできるだけ具体的に思い出して下さい。またそので

きごとがあなたにとってどんな意味を持っているのかも考えてください。それでは、そのできごとについてできるだけ詳しく話してください。”と教示した。応答が終わると、実験者は謝辞を述べ実験を終了した。

Table 2 査定基準

A 感覚運動的スタイル

(初期 キーワード：見える、聞こえる、感じる)

A1 1 点

A1-1 外面的要素の羅列にとどまっている。

A1-2 話していることが断片的で、因果的でない。

A1-3 経験が“見える”“聞こえる”“感じる”など感覚的に捉えられている。

A1-4 経験が、感情的要素の強い表現で述べられている。

(後期 キーワード：思い込む、信じる)

A2 2 点

A2-1 事実の外面的な事だけが述べられている。

A2-2 経験の捉え方が自己中心的で、一方的なものである。

A2-3 勝手に作り上げたイメージや思いこみが表現されている。

A2-4 限られた経験が、過度に一般化して表現されている。

B 具体操作的スタイル

(初期 キーワード：～する)

B1 3 点

B1-1 根拠がはっきりしていて、因果的に述べられている。

B1-2 自己の複雑な内面の感情や思考は述べられていない。

B1-3 経験が、順序よく具体的かつ詳細に述べられている。

B1-4 過去の感情が冷静に述べられている。

(後期 キーワード：もし～なら～する)

B2 4 点

B2-1 具体的経験が自分の視点で整理されている。

- B2-2 自己の内面的な感情や思考が述べられている。
- B2-3 感情や思考の分析が行われ、その根拠が示されている。
- B2-4 特定場面の分析のみで、他の場面との比較はされていない。

C 形式操作的スタイル

(初期 キーワード：パターン、自己)

C1 5点

- C1-1 複数の関係が比較され分析されている。
- C1-2 いくつかの場面が比較され分析されている。
- C1-3 自己の思考、行動、感情のパターンが述べられている。

- C1-4 自己のパターンが分析・評価され、抽象的な言葉で表現されている。

(後期 キーワード：パターンのパターン)

C2 6点

- C2-1 過去の分析もされ、現在との関わりが述べられている。
- C2-2 自己の思考や行動について、様々なパターンが述べられている。
- C2-3 いくつかの異なった状況を比較・対比してこれを1つの形態にまとめている。
- C2-4 いくつかのパターンに共通するパターンが表現されている。

査定の仕方：逐語記録の全体から、もっともあてはまる項目を選び、その得点を与える。同一スタイルの複数の項目に該当する場合（例えば、B2-1とB2-2）も、1つの得点を与える。異なるスタイルに該当する場合は、いずれかより優位であると思われるものを選び、その得点を与える。1人の実験参加者は1点～6点のうちのいずれか1つの得点を与えられる。

査定

録音された全応答について、事前、事後の応答の逐語記録を作成し、各応答における認知発達的スタイルの査定を行った。査定基準(Table2)

に基づき、6つのスタイル（3スタイル×前期・後期）に分類し、発達水準の最も低いスタイルには1点を与え、最も高いスタイルには6点を与えた。スタイルの決定には、応答全体を考慮しながらその中で最も優位な発達スタイルを選び、その実験参加者の応答に対するスタイルとした。認知発達的スタイルの査定は、筆者と実験者の2名が独立に行い、不一致なものについては合議によって値を決定した。後に本研究にはたずさわっておらず、DCT理論に基づく別の研究を行っている大学院生にすべての応答の査定を行ってもらい、カッパ係数を算出したところ、 $k=.61$ の値が得られている。

結 果

認知発達的スタイルの変化

Table3は各群の事前と事後の応答における優位な認知発達的スタイルを得点化したものである。感覚運動的スタイルの初期は1点、後期は2点、具体操作的スタイルの初期は3点、後期は4点、形式操作的スタイルの初期は5点、後期6点とした。これらの点数は名義的な意味合いの強いものであるが、認知発達的スタイルを縦関係のものと見れば水準と表現でき、横関係とみれば定位と表現できるであろう。これらの値について群ごとにサイン検定を行った結果、感覚群の変化は有意でなく、具体群では5%水準、形式群では1%水準で有意であった。Table3で明らかのように、具体群と形式群では事前よりも事後において、より高い水準の認知発達的スタイルが見られたといえる。

変化した応答例

実際にどのような応答が得られ、どのように査定したのかを、いくつかの事例で示しておく。査定の際にはアンダーラインのところが重視されている。No.はそれぞれTable3における番号と対応している。得点の根拠となった査定基準はTable2の番号と対応している。

Table 3 各群の事前・事後応答において示された優位な認知発達的スタイル

参加者	感覚群			具体群			形式群		
	事前	事後	変化	事前	事後	変化	事前	事後	変化
1	2	1	-1	1	3	2	1	1	0
2	3	4	1	1	1	0	1	5	4
3	1	1	0	1	3	2	1	3	2
4	3	1	-2	1	3	2	1	2	1
5	1	1	0	3	5	2	4	4	0
6	3	2	-1	3	4	1	1	4	3
7	3	3	0	1	3	2	1	3	2
8	3	3	0	3	3	0	4	5	1
9	1	1	0	3	4	1	3	4	1
10	3	4	1	3	1	-2	1	4	3
11	3	4	1	1	3	2	1	3	2
12	1	1	0	3	1	-2	1	4	3
13	1	1	0	1	3	2	1	4	3
14	3	3	0	1	1	0	4	4	0
15	3	1	-2	1	2	1	1	3	2
計	+ -	3 4		+ -	9 2		+ -	12 0	
サイン検定		n.s.			*				**

* p < .05, ** p < .01

＜感覚群の事例：No.15＞事前：すごく腹が立ったことは、ある人なんですけど、授業中に、他の生徒とか、全然関係ない人がいる前で怒ったり、嫌味言ったりするんですね。そんなの2人のときに言えばいいのに、あえてそういう場所で言うんです。あれはすごく腹が立ちましたね。(B1-4) 3点

事後：近頃興奮したのが、最近ハムスター飼ったんです。ずっと欲しくて、やっと飼って。しかも2匹も飼っちゃって。すごいかわいくって、今あの子たちに私すごく癒されてますね。(A1-4) 1点

＜具体群の事例：No.4＞事前：さっきな、研究保育の反省会でな、そんとき A 先生が言った言葉がな、B 先生がおるじゃん、あと、付属幼稚園の C 先生が、おってな。2人をな、本当はこの

C 先生なんじゃけど、今日子どもが B 先生のことを C 先生とまちがつとったらしくて、それが面白かったです。(A1-2) 1点

事後：つらかったことで、教育実習のな、2週間の間の、土、日、月の3連休の最後の休みに、久しぶりにバスケをしようと、中学校の弟の○○くんてのがいて、その子バスケ部じゃけ、いっしょにバスケしようと思って、もう一人弟の×××くんがおって、その日4時間ぐらいバスケをして、そんで寝て、次の日起きたら、筋肉痛で、めっちゃ痛くて、階段を、2階に寝とったんじゃど、降りれんぐらいになって、本当にやばくて、両足動かんぐらいの筋肉痛で、実習に行って、で、子ども達と遊ぼうと思うと、足が痛いので遊べず、掃除んときも、そういうときには限って下におはじきとかいっぱい落ちとっ

て、ううう、うううってなりながら一人で、痛いのを我慢しながら掃除したり、そうやって、自分の体がそういう子どもと遊べないようになってしまったことがつらかったです。(B1-3) 3点

＜形式群の事例：No.2＞事前：最近一番印象に残っていることは、やっぱり、リーグ、試合が終わって、先輩が引退してしまったことが印象に残ってて、やっぱりなんか、自分の自分らのこれからのことを考えしていくっていう意味ではすごく責任を感じる機会になったし、なんか、先輩がいなくなってしまったのはすごくつらいし、悲しかったです。(A1-4) 1点

事後：クラブのことばっかりなんですけど、やっぱり怪我をして、このリーグっていう大きい試合が終わってから病院に行っていろいろ話をしたんですけど、そのときに、それまでもずっと、やっぱり治らないかもっていわれてたときもあって、そういうときに、すごい、なんかすごいがむしゃらに、どうせ治らないんだったらって思って部活をやったりとか、みんなに置いていかれたくないとか無理してやったときとかもあったんだけど、やっぱりそういうときにすごいみんなが、真剣に怒ってくれた。最初は何でこんなに怒られるんやろとか思ったけど、さっき、この人たちがしゃべてるのを見て、私なんかすごい幸せな環境にいるんだなあって、すごい思ってそうやって本気で怒ってくれるっていうのは私のことをちゃんと考えてくれるってことだと思うし、最近その手術をどうしようっていうときでもすごい一緒に悩んでくれて、なんかいろんな意味で自分をすごい大事にできる環境にいるなって思って、自分のことも大事に思えるから、友達のことも、大事に思えるんです。部活の友達とか、大学のほかのともだちとっても。なんか自分をすごい幸せだなって怪我のことがあって、すごいそれを実感しました。(C1-3) 5点

応答量の変化

事前と事後での応答量の変化を調べるために、

それぞれの実験参加者の逐語記録に基づいて応答音節数をカウントした。特殊音節（拗音、促音、撥音、長音）はすべて1音節としてカウントした。Table4は各群の事前、事後における平均応答音節数を示したものである。少数の事例で極端に長い応答があったので、その影響を抑えるために対数値に変換して対応のあるt検定を行った。その結果、感覚群と具体群の変化は有意ではなかったが、形式群では5%水準の有意な変化（増加）が認められた ($t=2.55$)。また、3群全体でも1%水準で有意な変化（増加）が認められた ($t=3.00$)。すなわち、形式群および3群全体では、事前よりも事後において応答量が増加したといえる。

Table 4 各群の平均応答音節数

		事前	事後	差異
感覚群	<i>M</i>	212.9	228.2	15.3
	<i>SD</i>	118.3	120.7	123.9
具体群	<i>M</i>	286.6	366.7	80.1
	<i>SD</i>	314.3	410.7	235.0
形式群	<i>M</i>	190.3	285.1	94.7
	<i>SD</i>	141.6	151.7	180.9
全 体	<i>M</i>	230.0	293.3	63.4
	<i>SD</i>	209.8	262.6	184.6

議 論

本研究の1つの目的は、発達カウンセリング・療法 (Ivey et al., 2005) の考え方従って、3つの認知発達的スタイルを分かりやすく表現した示範ビデオを作成することであった。Ivey (1990, 福原訳日本語版 1994) が作成したビデオテープを参考にしながら、テーマを“最近経験した印象に残るできごと”に関するものとして5つのシナリオを作成した。内容として“怒り”を取り上げたのは、それが日常体験する情動の中でもっとも代表的なものであり、感覚運動的スタイルの特徴を示すのに、もっとも表現

しやすいと考えたからである（玉瀬、2000）。3つの認知発達的スタイルの違いについては簡単な説明を受けただけで、本研究の目的について詳しく知らない5人の大学生によって、これらのビデオは筆者らが意図したとおりに識別された。このことは、3種類のビデオが実験者の意図に沿って作られたとみなせることを示している。感覚運動的スタイルでは多くの怒りの情動的表現が必要であり、文字で表されたものを読んだだけでは十分それは伝わってこない。このことはビデオでの表情や声の調子などの非言語的手がかりによって、怒りを表す多くの部分が表現されていることを示している。具体操作的スタイルと形式操作的スタイルの違いを表現するのはより難しい。その違いは、前者が実際に起こったできごとの単なる叙述であり、後者はそのできごとのより抽象的な表現になっているところにある。両者はともにそれほど非言語的手がかりに違ひがないので、よく話の内容を聞いていないと区別がつきにくい。したがって、両者の違いをあらかじめ DCT の理論にそって説明したうえでビデオを見せるとより効果的であろう。本研究のものはまだ試作の段階であり、さらに改善する必要があるといえよう。この種のビデオを多様に開発すれば、異なる認知発達的スタイルの違いがどこにあるのかを説明するのに役立てることができ、カウンセラー訓練のための教材としても有効なものになると考えられる。

本研究では、試作されたビデオを用いて、モデリングの効果を検討した。ビデオをみせることがカウンセラー訓練の過程でいかに効果的であるかは、マイクロカウンセリングの研究において十分に実証されている（Daniels, 2003；玉瀬・田中, 1988）。しかし、異なる認知発達的スタイルのビデオが、どの程度に視聴者の言語的応答に影響を与えるかについてはまだほとんど検討されていない。本研究では3つのスタイルの相対的効果性について実証的に検討した。その結果、具体操作的スタイルと形式操作的スタイルのビデオを見せたことにより、実験参加

者の認知発達的スタイルが変化した。とりわけ形式操作的スタイルでの変化が顕著であった。ビデオのインパクトからすれば感覚運動的スタイルがもっとも強烈であるが、実験参加者の応答の変化には影響しなかった。このことはどのように理解すればいいのだろうか。テーマが“最近経験した印象に残るできごと”であり、教示によって、“怒り”などの情動が想起されやすいように方向づけを行っているので、事前査定の段階で感覚運動的スタイルが出やすくなっている。実際に 58% の実験参加者は感覚運動的スタイルで応答している。したがって、感覚群ではもともと持っているスタイルとモデルのスタイルが同一であり、モデルを見ることによって他のスタイルに移行する可能性が少なかったといえる。具体群と形式群ではモデリングの効果が認められた。このことは、もともとその人にとって優位である認知発達的スタイルとは異なるモデルを提示することによって、認知発達的スタイルの移行が促されたことを示唆している。ただし、形式群においても形式操作的スタイルに移行した実験参加者はわずか 2 名であり、多くの者は感覚運動的スタイルから具体操作的スタイルへと移行している。この点についてモデルがどのような役割を果たしたのかを考えることも興味深いが、本研究だけから結論を導くことは差し控えたい。論点としては、単なる模倣であったのか、より本質的な学習をしているのかが問題となるように思われる。本研究では 2 人の演者が異なる場面を演じており、2つの場面から伝達される共通のスタイルが視聴者に影響を与えるので、単なる模倣ではないと考えてよいであろう。この点については、モデルを用いず実験参加者に直接質問した先行研究（玉瀬・光武, 1993；光武・玉瀬, 1995）の結果なども合わせて考えてみる必要がある。実験としては事前に認知発達的スタイルをそろえて介入を行うのが理想的であるが、実験操作的には難しく、この点は今後の検討課題として残されている。

次に、応答量について考えてみよう。3 群に

共通して事前査定よりも事後査定で応答量は増加する傾向があり、この傾向は形式群では有意であった。また、3群ごみで見た場合も有意であった。このことは、モデリングによる反応促進効果が示されたことを示唆している。モデリングはどのように話せばいいのか、どのくらい話せばいいのかなどさまざまな具体的な手がかりを与えるので、モデルと類似の反応を促すことになる。形式群で認知発達的スタイルの移行がもっとも多く見られ、応答量も増加したことはより高次の発達水準への垂直的発達を促すのにこの種のモデリングが有効であることを示唆している。ただし、介入はその人が示している優位な認知発達的スタイルにより近いところで行った方がいいという考え方もある（玉瀬・光武、1993）、さらに検討を重ねなければならない。

マイクロカウンセリングとの関連で、本研究はどのように位置づけられるであろうか。発達カウンセリング・療法（Ivey et al., 2005）では、カウンセリングにおいてクライエントのより健康な側面をいかにして活性化するかに焦点があてられている。基本的傾聴技法を活用して、クライエントの認知発達的スタイルを確認し、そのスタイルに合わせて面接を進め、やがて発達を促すためにさまざまな理論から取り込まれた多様なマイクロ技法を試していく。その際、各種の技法はもっともクライエントの発達状態に適合したものを選ぶことが望ましい。本研究で開発された示範ビデオは、異なる認知発達的スタイルを示す例として用いられ、初心カウンセラーにそれぞれのスタイルのイメージを持たせるのに有効であると考えられる。テキストだけではイメージしにくいが、ビデオでの実例があるとイメージしやすい。ただし、そのイメージに拘束されてしまうおそれがあるので、複数のビデオを見せることが必要である。その意味で、DCT理論を理解した上で、例えばAPA（アメリカ心理学会）で開発されているさまざまな理論家による面接の実例を見せると、クライエントの認知発達的スタイルがよく見えてくるはずで

ある。Ivey et al. (2005, p206) は、どの認知発達的スタイルではどのような技法が適切であるのかを示しており、カウンセリング実践においても役立てることができよう。

要 約

発達カウンセリング・療法理論に基づいてクライエントの認知発達的スタイルを査定し、そのスタイルに適合するカウンセリングを行うことが求められている。初心カウンセラーにとって、モデル・ビデオは認知発達的スタイルの違いを理解するのに有効である。本研究では、2つの場面で3種類の認知発達的スタイルを示しているクライエントのビデオを開発した。これらのビデオを用いて、45名の大学生を実験参加者とし、3群（各群15名）に割り当てて実験を行った。事前に“最近経験した印象に残るできごと”について応答を求めた後、感覚運動的スタイル（感覚群）、具体操作的スタイル（具体群）、形式操作的スタイル（形式群）のビデオ（各2本）を見せた。ビデオでは、2つの場面で異なる大学生が“怒り”を表現している。その怒りの表現の仕方が、認知発達的スタイルごとに異なっていた。各群の実験参加者は、これらのスタイルのいずれかのモデル・ビデオを視聴した後、事後査定で事前と同じ質問をされた。この実験の主な結果は、具体群と形式群では事前から事後へと応答の認知発達的スタイルが有意に変化したことである。また、形式群および3群全体では、応答音節数で示された応答量が事後において有意に增加了ことである。これらの結果は、ビデオを視聴させることが視聴者にどのような影響を与えるかを実証したものとして意味があるといえよう。カウンセラー訓練においてもカウンセリングの実践においても、認知発達的スタイルに関するビデオを見せた際の影響についてこのような事実をふまえて対応することが望ましいといえる。

引 用 文 献

- Cashwell, C.S., Myers, J.E., & Shurts, W.M. (2004). Using the Developmental counseling and therapy model to work with a client in spiritual bypass: Some preliminary considerations. *Journal of Counseling and Development*, **82**, 403-409.
- Daniels, T. (2003). A review of research on microcounseling: 1967-present. In A.Ivey & M. Ivey, *Intentional interviewing and counseling: An interactive CD-Rom*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- Fukuhara, M. (1987). Adolescent cognitive development: From the viewpoint of developmental therapy. Paper presented at the Conference, 9th International Society for the Study of Behavioral Development.
- 福原真知子・アイビイ, A. E.・アイビイ, M. B. (2004). マイクロカウンセリングの理論と実践 風間書房
- Ivey, A. E. (1986). *Developmental therapy*. San Francisco, CA:Jossey-Bass. (福原真知子・仁科弥生共訳 1991 発達心理療法 丸善)
- Ivey, A.E. (1988). *Intentional interviewing and counseling:Facilitating client development* (2nd ed.). Pacific Grove, CA:Brooks/Cole.
- Ivey, A.E.(1991). *Developmental strategies for helpers:Individual, family, and network intervention*. Pacific Grove, CA: Brooks/Cole.
- Ivey, A. E., & Brooks-Harris, J. E. (2005). Integrative psychotherapy with culturally diverse clients. In J.C. Norcross & M.R. Goldfried (eds.). *Handbook of psychotherapy integration* (2nd ed.). Oxford University Press, pp.321-339.
- Ivey, A., D'Andrea, M., Ivey, M., & Simek-Morgan, L. (2002). *Theories of counseling and psychotherapy: A multicultural perspective* (5th ed.). Boston: Allyn & Bacon.
- Ivey, A. E., & Goncalves, O. F. (1988). Developmental therapy: Integrating developmental processes into the clinical practice. *Journal of Counseling & Development*, **66**, 406-413.
- Ivey, A. E., & Ivey, M. B. (1990). *Developmental counseling and therapy*. (福原真知子日本語版監修 1994 発達心理療法による面接技法 ビデオ全 4 卷 丸善)
- Ivey, A. E. & Ivey, M. B. (1990). Assessing and facilitating children's cognitive development: Developmental counseling and therapy in a case of child abuse. *Journal of Counseling and Development*, **68**, 299-305.
- Ivey, A., Ivey, M., Myers, J., & Sweeney, T. (2005). *Developmental counseling and therapy: Promoting wellness over the lifespan*. Boston: Lahaska Press.
- Ivey, A. E., & Rigazio-DiGilio, S. A. (1991). Toward a developmental practice of mental health counseling: Strategies for training, practice, and political unity. *Journal of Mental Health Counseling*, **13**, 21-36.
- Kunkler, K.P. & Rigazio-DiGilio, S.A. (1994). Systemic cognitive-developmental therapy. *Simulation and Gaming: An international Journal of Theory, Design, and Research*, **25**, 75-87.
- 光武健介・玉瀬耕治 (1995). 発達カウンセリング・療法理論における認知的発達水準の査定と介入 カウンセリング研究 **28**, 143-153.
- Myers, J. E. (1998). Bibliotherapy and DCT: Co-constructing the therapeutic metaphor. *Journal of Counseling and Development*, **76**, 243-250.
- Myers, J. E., Shoffner, M. F., & Briggs, M.K. (2002). Developmental counseling and therapy: An effective approach to understanding and counseling children. *Professional School Counseling*, **5:3**, 194-202.
- Piaget, J. (1947). *La psychologie de l'intelligence*. Librairie Arman Colin. (波多野完治・滝沢武久訳 1967 知能の心理学 みすず書房)
- Rigazio-DiGilio, S. A. (1994a). A coconstructive-developmental approach to ecosystemic treatment. *Journal of Mental Health Counseling*, **16**, 43-74.
- Rigazio-DiGilio, S. A. (1994b) Beyond paradigms: The multiple implications of a coconstructive-developmental model. *Journal of Mental Health Counseling*, **16**, 205-211.

- Rigazio-Digilio, S. A., & Ivey, A. E. (1990). Developmental therapy and depressive disorder: Measuring cognitive levels through patient natural language. *Professional Psychology: Research and Practice*, **21**, 470-475.
- Rigazio-DiGilio, S. A. & Ivey, A. E. (1991). Developmental counseling and therapy: A framework for individual and family treatment. *Counseling and Human Development*, **24**, 1-19.
- Rigazio-DiGilio, S. A. & Ivey, A. E. (1993). Systemic cognitive-developmental therapy: An integrative framework. *The Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, **1**, 208-219.
- 新宮晴子 (2006). “発達カウンセリング・療法に関する基礎的実証的研究”を聴講して私が学んだこと 日本マイクロカウンセリング学会ニュースレター, **16**, 3-4.
- 玉瀬耕治 (1998). カウンセリング技法入門 教育出版
- 玉瀬耕治 (2000). 発達カウンセリング・療法における肯定的・否定的経験のモデリング 日本教育心理学会第42回総会発表論文集
- 玉瀬耕治・福田依知子 (1998). 発達カウンセリング・療法理論における認知発達的視点の拡大に関する研究 奈良教育大学紀要, **47** (1), 197-207.
- 玉瀬耕治・福田依知子 (1999). 大学生における認知発達的定位と不合理な信念との関係 奈良教育大学紀要, **48** (1), 161-172.
- 玉瀬耕治・光武健介 (1993). 実験的面接における言語的応答の認知水準に及ぼす発達的介入の効果 奈良教育大学紀要, **42** (1).
- Tamase, K., & Rigazio-DiGilio, S.A. (1997). Expanding client worldview: Investigating developmental counselling and therapy assumption. *International Journal for the Advancement of Counselling*, **19**, 229-247.
- 玉瀬耕治・島本淳子 (1995). 実験的面接における応答の認知的発達水準に及ぼすモデリングの効果 奈良教育大学紀要, **44** (1), 249-263.
- 玉瀬耕治・田中寛二 (1988). マイクロカウンセリングに関する研究 奈良教育大学教育研究所紀要, **24**, 53-66.
- 山本眞利子 (1996). クライエントのレディネス状態の違いにおける解釈がクライエント反応の評定に及ぼす影響 カウンセリング研究, **29**, 1-8.
- 山本眞利子 (1997). クライエントの調節状態の違いにおける解釈がクライエントの気づき反応評定に及ぼす影響 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, **2**, 71-75.
- 山本眞利子 (1998). 解釈の内的で肯定的な原因帰属がカウンセラーと来談者の認知的反応評定に及ぼす影響 吉備国際大学社会福祉学部研究紀要, **3**, 123-131.
- 山本眞利子 (2001). 長期閉じこもり青年への発達心理療法に基づくカウンセリング過程モデルの実践的適用 カウンセリング研究, **34**, 180-191.
- 山本眞利子 (2002). 発達心理療法の観点によるエンカウンター・グループの発展過程 学生相談研究, **23**, 156-165.
- 山本眞利子 (2003). 授業における自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの試み 学生相談研究, **24**, 52-65.
- 山本眞利子 (2004). 自己解決志向型発達カウンセリングアプローチの試み ブリーフサイコセラピー研究, **13**, 19-28.

謝辞：本研究は筆者が奈良教育大学在職中に行われたものである。実験者として参加し、全面的なご協力をいただいた橋原めぐみさん、モデルの役割を演じていただいた演劇部の皆さん、ならびに実験参加者の皆さんに心より感謝いたします。

The Effect of Different Video-Modeling of Cognitive-Developmental Styles Based on the Developmental Counseling and Therapy Assumption upon Students' Verbal Responses

Koji Tamase (*Tezukayama University*)

To indicate typical responses in different cognitive-developmental styles two situations were selected, and according to Developmental Counseling and Therapy (DCT) assumptions three cognitive-developmental styles, sensorimotor, concrete, and formal styles, were role-played by students' players and videotaped. The operation check revealed that the three styles were played successfully to use in the experiment. Forty-five undergraduates served as the participants, and they responded individually to the pre- and post-assessment questions. After they responded to the pre-assessment question they watched the two videotapes in either one of the three styles, sensorimotor, concrete, and formal styles. The results revealed that the participants in the concrete- and formal-groups significantly changed their styles to the upper direction, whereas the participants in the sensorimotor-group did not change their styles. The formal-style video group showed significantly longer responses after video watching. These results suggest that different effects will happen when the trainee in DCT watched various typical-style videos.

Key words: developmental counseling and therapy, video modeling, formal style.

2007.1.30 受稿, 2007.2.10 受理

学会：概観と現状

マイクロカウンセリング (microcounseling) および 日本マイクロカウンセリング学会について

マイクロカウンセリングは1960年代に米国の Dr. Allen E. Ivey とその共同研究者によって開発されました。これは、現在カウンセリング、心理療法、社会福祉など援助の仕事に携わる人々の間ではバイブルのようなものとして、国内外で注目されています。これはカウンセリングにおいて共通の「基本的姿勢」とみなすことができる姿勢「傾聴」を土台においています。そしてこの姿勢をかたちにあらわす技法のトレーニングをします。技法トレーニング法は5段階で構成され、職場での再現／使用がスムーズにいくように工夫されています。訓練は初心のカウンセラーにも有効ですがまた、すでに特定のカウンセリングアプローチに習熟しているカウンセラーもこれにより、各自の用いる技法やパターンを再認識し、さらにその上達をこころみることができます。これらの点でマイクロカウンセリングは理論的にも、トレーニングの上でもカウンセリングのメタモデル（一つのカウンセリングアプローチというよりカウンセリングの上位概念）であるといわれます。

またこれを用いての発達心理療法（アイビイ博士の開発による）は個人を関係性の中でとらえ、人々の諸種の問題解決やウェルネス（たとえばキャリア選択、トラウマなど）の援助に貢献しています。

マイクロカウンセリングのもう一つの、そして重要な特徴は、これが日常の人間関係におけるコミュニケーションの促進／改善に大変有効であるということあります。すなわち上述した‘基本的姿勢’はサイコエデュケーション（心理教育—心理学的知見を用いて人々を教育し、各々の発達段階にある人々の精神的健康に役立てること）の形で諸種の現場におけるコミュニケーションやソーシャルスキルストレーニングに役立つことがわかってきてています。現場とは、家庭（親子関係）、教育（教師、生徒、保護者等）、医療（医師、看護師、その他スタッフ、患者）、福祉（ワーカー、対象者等）、企業／組織（管理者、従業員等）など「援助関係」の場をいいます。マイクロ技法はこれらの現場におけるグループアプローチにも有効です。

日本には福原真知子によって1980年代に導入され、1985年、日本マイクロカウンセリング研究会（代表 福原真知子）が設立されました。それ以来研究／研修活動を続けておりますが、特に1997年以降は年4回の研究会／研修会を定期的に開催し、年次総会・大会（公開）の記録は小冊子として刊行しています。会報（ニュースレター）は年2回発行しています。なお、後述のNPO設立以来（2002）研修会は主としてそちらで開催しています。米国でアイビイ博士が主宰するマイクロトレーニングアソシエイツをはじめ世界におけるマイクロカウンセリング研究家と緊密な関係を保っています。2006年には導入20年を機に日本マイクロカウンセリング学会の名称を改め※、学術団体として、よりふさわしい組織を目指して活動を続けております。研究会、学会の活動状況をまとめたものを21Pに付しました

NPO（特定非営利活動法人）心理教育実践センターについて

平成14年（2002年），私どもはカウンセリング，特にマイクロカウンセリング研究会の成果（基礎と実践の統合の試み）の一般化をはかり，人々のウェルネスに貢献する活動が公認されるという目的で立ち上げました。すなわちこれは，心理学の知見／成果を一般の人々に伝えるための教育〈サイコエデュケーション：psychoeducation〉を実践するものであります。ここではカウンセラーなどいわゆる援助の専門家以外の人々の，それぞれの生活の場〈教育，福祉，産業，医療など〉においてもマイクロカウンセリングの知見を役立てることがねらいです。その成果をフィードバックし，さらなるカウンセリング研究にも役立てたいとするものです。定期的には年2回の研修会を開催し，それを記録した小冊子（年1冊）とニュースレターを会員に無料で送付しております。

マイクロカウンセリングをトゥールとする心理教育について

心理教育という言葉は最近よく使われるようになりました。ここで私どもが言う「心理教育」とはいわゆるサイコエデュケーション（psychoeducation）です。すなわちこれはカウンセリング心理学的発想——カウンセリングの知見を広く人々の成長・発達，開発，予防，精神的健康の維持に役立てる——からきております。さかのばれば，心理学分野にはいわゆる，心理学的知見を広く人々の生活に役立てようという，もともとの狙いがありましたが，心理学分野のカウンセリングについてこのような試みが刺激されたのは，George Miller (1969) がアメリカ心理学会の会長就任式で，‘giving psychology away’と呼び心理学の活用について，心理学研究者／実践家の自覚をうながしたということがありました。これは心理学全般にいえることであったわけですが，マイクロカウンセリングの創始者である Allen E. Ivey がカウンセリング心理学領域で，同学の人々のそれへの自覚，その役割の再認識の必要性を喚起し，アメリカ心理学会・カウンセリング心理学部会ではそれを取り上げ，学会誌に特集号をくみました。

のことからも Ivey は近年の「心理教育」の発展について，その先駆的役割を果たしている一人といえましょう。日本マイクロカウンセリング研究会主催の研究会ではその年次総会・研修会（2001）においてはいち早くこれをテーマとし，報告書も出版しております。

※学会名の変更については平成17年度第1回運営委員会（平成17年5月19日）にて審議の上，日本マイクロカウンセリング研究会平成17年度総会において了承されました。なお名称変更是，あらたな発展をめざして，研究会から学術協力団体への過渡的措置として了承されたものです。これにともない年次発行の会誌（小冊子）は学会誌に，研究会は学術研究のスタイルとしました。

日本マイクロカウンセリング研究会 行事一覧

年 度	会 名	開催日	テ ー マ
1994(H 6)年度	(アイビイ夫妻招聘)研修会	1994.3.28	マイクロカウンセリング
	(アイビイ夫妻招聘)研修会	1994.3.29	発達心理療法
1997(H 9)年度	(アイビイ夫妻招聘) マイクロカウンセリング セミナー	1997.8.20	さらなる理論と実行に向けて
1998(H 10)年度	臨時総会	1998.12.6	講話「カウンセリングとアセスメント」
1999(H 11)年度	第1回研修会	1999.6.27	ニューマイクロカウンセリングを学ぶ
	第2回研修会・総会	1999.8.29	21世紀に向けてのカウンセリング —マイクロカウンセリングの基本と展開—
	第1回研究会	1999.12.26	「マイクロカウンセリング 基本的かかわり技法」を読む（1）
	第2回研究会	2000.3.25	「マイクロカウンセリング 基本的かかわり技法」を読む（2）
2000(H 12)年度	第1回研究会	2000.6.24	事例に学ぶ—医療臨床現場・福祉臨床現場から
	第1回研修会・総会	2000.8.26	21世紀に向けてのカウンセリング —マイクロカウンセリングとサイコエデュケーション
	第2回研究会	2000.11.25	事例に学ぶ—教育現場から
	第2回研修会	2001.3.31	グループカウンセリングにおけるマイクロカウンセリング
2001(H 13)年度	第1回研究会	2001.6.23	積極技法を学ぶ（1）
	アイビイ夫妻招聘 ワークショップ(東京会場)	2001.8.19	マイクロカウンセリング技法によるグループアプローチ
	アイビイ夫妻招聘 ワークショップ(京都会場)	2001.8.21	マイクロカウンセリング技法の適用
	第2回研究会	2001.11.24	積極技法を学ぶ（2）
	第2回研修会	2002.3.23	「コミュニティジェノグラム」を中心に
2002(H 14)年度	第1回研究会	2002.6.22	マイクロカウンセリングに関する研究—ひとつの試み—
	第1回研修会・総会	2002.8.31	マイクロカウンセリングの原点にかえって
	第2回研究会	2002.11.24	肢体不自由児の授業実践への取り組み —マイクロカウンセリングの視点で—
	第2回研修会	2003.3.29	マイクロカウンセリングの原点にかえって
2003(H 15)年度	第1回研究会・総会	2003.8.30	マイクロカウンセリングの理論と実践—基本的傾聴技法の連鎖—
	第2回研究会（京都会場）	2004.3.27	教育分野を中心としたマイクロカウンセリング —個人と組織の成長・発達を促すために—
2004(H 16)年度	アイビイ夫妻を囲んで 第1回研究会・総会	2004.8.29	Wellness Over the Life Span — Microcounseling Approach —
	第2回研究会	2005.3.26	ライフサイクルを通してのウェルネス（wellness）を考える —マイクロカウンセリングの視点で—
2005(H 17)年度	MC 第1回研究会・総会 NPO 第1回研修会	2005.8.27	日本マイクロカウンセリング研究会20年をふり返って
	MC 第2回研究会	2006.3.25	人間援助のマイクロカウンセラー—被害者支援の立場から—
2006(H 18)年度	MC 第1回研究大会・総会	2006.8.26	ミニレクチャー「国際会議に参加して」 発達カウンセリング・療法に関する基礎的実証的研究 ウェルネスの研究①・②
	MC 研修会	2007.3.31	マイクロカウンセリング基礎トレーニング

NPO 心理教育実践センター 行事一覧

年 度	行 事	開催日	テ ー マ
2001(H13)年度	発起人会	2001.12.16	
	発会式	2002.4.27	講演「NPO 心理教育実践センターの発会に当たって」
	第1回研修会	2002.7.28	教育現場における対人コミュニケーション —マイクロカウンセリングの視点で—
	第2回研修会	2002.7.28	福祉・医療現場における対人コミュニケーション —マイクロカウンセリングの視点で—
2002(H14)年度	第1回研修会	2002.9.23	組織における人間関係
	第2回研修会	2003.6.21	マイクロ技法の一般化の試み
2003(H15)年度	NPO 心理教育実践センター設立2周年記念行事 (第1回研修会)	2003.8.31	人間援助のサービス 講演「人間性とカウンセリング」 マイクロカウンセリング技法を用いた援助 (ロールプレイングデモンストレーション)
	第2回研修会	2004.6.5	組織における対人コミュニケーション
2004(H16)年度	第1回研修会	2004.8.29	マイクロカウンセリングの研修 ライフサイクルを通じて心身の健康に向けて (日本マイクロカウンセリング研究会 平成16年度第1回研究会共催)
	第2回研修会	2005.6.25	ウェルネス(Wellness)を考える —みんなが健康に生きるとは—
2005(H17)年度	(水戸会場)	2006.5.27	人間援助のコミュニケーション

学会誌 マイクロカウンセリング研究 一覧

巻 号	年 度	内 容
第1巻第1号 Vol.1, No.1	2005年12月	卷頭言 研究会から学会へ 福原真知子 [記念講演] 生涯を通してのウェルネス 福原真知子 ご挨拶ならびに講師ご紹介 福原真知子 主題総説 肥田野 直 講演 Wellness over the Life Span — Microcounseling Approach — Ivey, A. E. & Ivey, M. B. ◇資料 山本 孝子
第1巻第2号 Vol.1, No.2	2006年3月	卷頭言 福原真知子 特別寄稿論文 Microskills and Wellness : Strength Training for the Future マイクロカウンセリングと人々のウェルネス 一生涯発達のための「強み」の発見と開発 Ivey, A. E. [解説] 福原真知子 《シンポジウム》 ライフサイクルを通してのウェルネス(wellness)を考える ご挨拶 福原真知子 話題提供 • 被害者臨床の立場から 川口 瑞子 • 地域臨床の立場から 寺川亜弥子 • スクールカウンセラーの立場から 小松 裕子 指定討論者 大西 靖子 森山 賢一

編集後記

本年も桜花爛漫のさ中、アルカディア市ヶ谷私学会館で研修会を催すことができました。今回はマイクロカウンセリングの基礎をふまえた研修会を、体系的かつ持続的に行うという課題を掲げてのものでした。おかげさまで、講師の玉瀬先生はじめ参加の方々のご協力によりますはその目的を果たすことができました。これについては後日、ニュースレター No.17でご報告致します。今後とも学会にふさわしい、研究・研修活動を行いたいと考えております。

学会誌への論文投稿もよろしくお願ひいたします。なお学会誌は ISSN (1881-6029) を取得いたしました。

マイクロカウンセリングの歩みと展望

福原眞知子 監修・編集
日本マイクロカウンセリング学会 編

B5判美装・370頁／定価(本体2,800円+税)／近刊

カウンセリング学習のための“メタモデル”の理論であるマイクロカウンセリングがわが国に導入されて20余年、その理論と技法は、教育・医療・看護・福祉・産業の分野はもとより、さまざまな人間援助の現場で広く活用されている。本書は、マイクロカウンセリング創設者A・E・アイビイ博士と共同研究者である福原眞知子博士が設立した研究会が行ってきた研究会・研修会での成果を基に、日本マイクロカウンセリング学会の活動の歩みとその実際を紹介する。カウンセラーのみならず人間関係の援助にかかる人への基本書。

[内容]

- I カウンセリングとアセスメント
- II ニューマイクロカウンセリングを学ぶ
- III 基本的かかわり技法を読む（1）
- IV 基本的かかわり技法を読む（2）
- V 事例に学ぶ（1）—医療臨床現場・福祉臨床現場から
- VI 事例に学ぶ（2）—教育現場から
- VII グループカウンセリングにおけるマイクロカウンセリング
- VIII 積極技法を学ぶ（1）
- IX 積極技法を学ぶ（2）
- X コミュニティジェノグラムを中心に
- XI マイクロカウンセリングに関する研究—ひとつの試み
- XII 肢体不自由児の授業実践への取り組み—マイクロカウンセリングの視点から
- XIII マイクロカウンセリングの原点にかえって—マイクロカウンセリングの視点で

川島書店

〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-15-17
Tel (03) 3365-0141 (代表) / Fax (03) 3365-1101
URL <http://kawashima-pb.kazekusa.co.jp>

◎近刊のご案内◎

マイクロカウンセリング技法

—事例場面から学ぶ—

福原眞知子 監修

A5判 230頁 予価 3150円(税込) DVD付

マイクロカウンセリング技法をわかりやすく解説。事例場面を通して技法を習得。

本文に掲載された、「基本的傾聴技法の連鎖」「肯定的資質の探求」「基本的傾聴技法と積極技法の連携」の事例場面4つをDVDに収録。悪い例と良い例を見ることによりマイクロ技法がいかに有效地に使われているかを学び、技法を身につけよう。

◎好評の既刊◎

マイクロカウンセリングの理論と実践

福原眞知子 アレン・E・アイビイ メアリ・B・アイビイ 著

A5判 570頁 4830円(税込) 2007年3月重版

Ivey, A. 博士によるマイクロカウンセリングは現場に役立つカウンセリングの基本モデルとして米国内外で注目されてきた。日本でも導入以来20年が経過し、ひとつの節目をむかえた。そのコンセプトを確認しつつ、文化的に適合する技法の展開が望まれる。それらをふまえ、アイビイ博士の協力を得て本著を編集／執筆した。とくに技法の説明では博士らの近著、Intentional Interviewing and Counselingに負うところが大きい。また、臨床の場で不可欠のリサーチエビデンスについては、マイクロカウンセリング研究をまとめたDaniels, T. 博士から翻訳許可をいただき、これを紹介した。

カウンセリングへの道—高等教育における日米二国間のプロジェクトの報告—

ウェズリー・P・ロイド 著 福原眞知子 訳 A5判 262頁 3990円(税込)

1951年に教育使節団として派遣されたアメリカ講師団は SPS を日本の教育に導入し、これは現在の学生相談の原点となった。本書はその折の報告書の訳本である。

来談行動の規定因—カウンセリング心理学的研究—

福原眞知子 著 A5判 354頁 12600円(税込)

戦後の教育改革を契機に大学の教育理念は全人的発達に向けられ学生相談が導入されたが、来談行動を規定する要因についてカウンセリング心理学の立場から取組む。

風間書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
電話 03-3291-5729 FAX 03-3291-5757 振替 00110-5-1853
<http://www.kazamashobo.co.jp> E-mail pub@kazamashobo.co.jp

日本応用心理学会 創立60周年記念出版

応用心理学事典

日本応用心理学会 編 編集委員長：岡村一成

A5判・736頁 上製・函入 定価21,000円(本体20,000円) ISBN 978-4-621-07807-5

心理学に対する偏った知識を無くし、
社会の様々な問題解決に役立つ15分野からなる中項目事典

- 現代の心理学が多く分野に分化し、応用され発展してきた内容をわかりやすく解説。
- 私たちの生活に密着した身近な学問として正しく理解するための事典。
- 細分化された現代心理学の諸分野の研究水準が浮き彫りにされ、今後の研究活動に役立つ情報を提供。
- 日本応用心理学会の役員および会員約240名による執筆。300項目を見開き2頁で解説。
- 心理学に関心を持つ人などが偏った知識を無くし、心理学により興味を抱かれ、社会においてさまざまな問題解決に役立つ一冊。
- 付録には、文献ガイドや日本心理学諸学会連合加盟学会連絡先など役立つ情報を掲載。



好評発売中

マイクロカウンセリング ビデオシリーズ

翻訳監修：福原 真知子 日本マイクロカウンセリング学会 代表

- | | |
|-----|---|
| ビデオ | 新版マイクロカウンセリング 基本的かかわり技法編
日本語版 全3巻 セット価格110,250円(テキスト付) 各巻36,750円 別売テキスト3,150円 |
| ビデオ | 新版マイクロカウンセリング 積極技法編
日本語版 全3巻 セット価格110,250円(テキスト付) 各巻36,750円 別売テキスト3,150円 |
| ビデオ | マイクロカウンセリング技法の展開 I : 認知療法への適用
日本語版 全2巻 セット価格52,500円(解説書付) 各巻26,250円 |
| ビデオ | マイクロカウンセリング技法の展開 II : 行動療法への適用
日本語版 全2巻 セット価格52,500円(解説書付) 各巻26,250円 |
| ビデオ | 発達心理療法による面接技法 日本語版 全4巻 セット価格126,000円 各巻31,500円 |
| ビデオ | FACE TO FACE 日本語版 全3巻 セット価格189,000円(分売不可) |
| ビデオ | 子どものためのカウンセリング 日本語版 全2巻 セット価格63,000円 各巻31,500円 |

★上記ビデオのご注文は

丸善出版事業部 映像メディア部TEL (03) 3272-0518 FAX (03) 3272-0675までお願いします。

※価格は税込

関連書籍

発達心理療法 —実践と一体化したカウンセリング理論—

Allen E.Ivey 著 福原 真知子・仁科 弥生 訳 A5判・432頁 定価7,140円(本体6,800円) ISBN 4-621-03606-8

発達心理療法は、多くの異なる治療法を一つに統合する力であり、その大家となるフロイド、ピアジェを集中的に研究し、その理論と実践を提示。治療を目的とした実験的なカウンセリング、心理療法、症例分析、効果などを収める。

心理学事典

Andrew M.Coleman 著 藤永 保・仲 真紀子 監修

A5判・952頁 上製・函入 定価23,100円(本体22,000円) ISBN 4-621-07302-8

普及版(並製) 定価 6,825円(本体 6,500円) ISBN 4-621-07525-X

基礎から臨床まで、最新の心理学用語を網羅。8,850の見出し語を収載。重要な用語と概念には創始者または発明者を明記。見出し語、キーワードは英語付。

丸善 [出版事業部] 〒103-8244 東京都中央区日本橋 3-9-2 第二丸善ビル 営業部TEL(03)3272-0521 FAX(03)3272-0693
<http://pub.maruzen.co.jp/>

編集委員

編集顧問 肥田野 直
委員長 稲垣 貢
委 員 森山 賢一 鈴木 祐弘
玉瀬 耕治 (ABC 順)

マイクロカウンセリング研究 第2巻 第1号

The Japanese Journal of Microcounseling Vol.2, No.1

©2007年3月31日発行

編集責任 日本マイクロカウンセリング学会
会長 福原眞知子
発 行 日本マイクロカウンセリング学会
会長 福原眞知子
本 部 〒167-0034 東京都杉並区桃井1-18-7
事 務 局 〒163-1030 東京都新宿区西新宿3-7-1
新宿パークタワー 30階
TEL 03-5326-3415
FAX 03-5326-3605
印刷・製本 株式会社厚徳社

無断複製・転載を禁じます。